



著作権保護コンテンツ

3.11 絵本プロジェクト いわて

Books for Children

年齢別に分けられ、子どもたちのもとに届けられる
たくさんの本。



末盛 千枝子 すえもり・ちえこ

1941年、東京生まれ。編集者。(株)すえもりブックス代表。まど・みちおの詩を、皇后美智子様が選・英訳された、『どうぶつたち・THE ANIMALS』と『ふしぎなポケット・THE MAGIC POCKET』、ニューデリーでの皇后美智子様のご講演をまとめた『橋をかける―子供時代の読書の思い出』のほか、国内外の絵本などを出版。2002～06年、IBBY国際理事、01～02、05～08年、JBBY副会長を務める。

被災地の子どもたちにも

絵本を！

「3・11絵本プロジェクトいわて」代表の末盛千枝子さんに聞く

写真／なかいすみきよし

大震災後、本にかかわる活動の中で、いち早くスタートしたのは、「3・11絵本プロジェクトいわて」でした。代表の末盛千枝子さんは、出版社代表・編集者として、元IBBY国際理事・元JBBY副会長として、「子どもと本」にかかわり続けて、現在は岩手県八幡平市に住んでいます。そんな末盛さんの「今」の思いを伺いました。

……今、被災地・避難所の子どもたちに必要な心のケアとはどういうものか。そして、そのような状況の中で、子どもの本にかかわる大人が果たせる役割にはどういうものがあるのか、お考えをお聞かせください。

私の立場で、子どもたちが今どのような状況なのかは、簡単には言えないと思っています。ただ、震災後に、宮古市の幼稚園で読みかきせに立ち会う機会があり、その中に、とても喜んで聞いている男の子たちにまじって、ひとりじつと動かない小さい女の子がいました。その子は、行方不明になったお母さんが帰ってくるのをずっと待っている子だったのです。私たちが、そん

な子どものためにできることは何か……。

少しずつ、何か小さな喜びの時間を積み上げていくことによつてしか、子どもたちの役に立つことはないと思っています。いろいろな方が、「なるべく早く元の生活に戻れるように」とよく言うけれども、残念だけど、私はそんなことはありえないと……。それぞれの人が失ったものはもう戻ってこない。戻ってこない状況の中で、少しずつ前進して生きていくって、気がついたら立ち直っていたということになるのだらうと思っています。

だから、私たちは「これをしたからあの子たちがこうなった」と簡単に決めつけられない。それは、被災した人たちに対して、本当に

失礼なことになってしまう。大切な人を失って、そしてもうそれは帰ってこないという状況を、子どもたちが受け入れるには、ものすごく時間がかかるでしょう。しかし、それでも少しずつ生きていく。それはもうきつと子どもも大人も同じではないか。ただ私は、IBBYの仕事をしてきた中で、空襲や災害に遭った子どもたちが、誰かのひざの上で絵本を読んでもらっていたときは、少し明るさを取り戻すという話をたくさん聞いてきました。だから、今度の災害が起こったときに、IBBYの活動にかかわってきた者として、そして今岩手に住む者として何をすべきだろうかということを考えました。そのときに、やはりIBBYの創設者イ

※1953年にスイスのチューリッヒで設立された国際児童図書評議会 (International Board on Books for Young People) の略称。子どもと子どもの本にかかわるすべての人をつなぐ世界的ネットワークです。JBBYはその日本支部。

著作権保護



末盛さん自身もエプロン持参で作業に加わる。

この日は33名が参加した、実に効率的な作業。



えほんカーを被災地へ！



避難所や仮設住宅をまわり、絵本を届けるための軽自動車を整備中です。

エラ・レップマンにならって、子どもたちに絵本を届けることではなにかと思っただけです。

……その具体的な活動として「3. 11 絵本プロジェクトいわて」をスタートされましたが、その活動の概要と現状について少しお話しください。

私は、昨年5月に父の郷里である岩手県に移り住んできて、いろんな人たちと知り合いになっていきましたので、「私たちに何かできないだろうか。IBBYではこういうことをしていました」というメールを友人たちに送ったのです。そうしたらすぐに、たくさんの方の返事が来て「本を通して何かしましょう」

ということになったのです。そして親友になっていた盛岡市中央公民館副館長の赤澤千鶴さんやその上司の坂田裕一館長、ボランティアグループの方々を被災地を訪問しお話を伺ううちに、必要なこと、なすべきことが見えてきました。そして「3. 11 絵本プロジェクトいわて」を立ち上げたときに、まるで「待つてました」という感じで、全国から「自分たちには何が出来るだろうか」と考えていました。このプロジェクトを知ったとき、私たちにできるのはこれだと思いました」というお手紙と一緒に、たくさんの方の絵本が送られてきました。こんなに大勢の方が、同じことを考えていたのかと驚きつつも、感動しました。

それから、あつという間に1日に段ボール箱が何百も届くようになりました。宅配便のトラックが一度に2台も3台も来たりするようになり、感謝をしつつも「大変なことになった」と困惑してしまいました。しかし、この盛岡市中央公民館には、大変素晴らしいボランティアの人たちが100名以上も登録されており、その人たちのやり方がきわめて効果的なのです。ほとんどの人が主婦ですから一日のうち午後の2時間だけ活動するということで、①送品伝票に何月何日に届いた何番目の箱だと記入する、②それを開けて、何冊入っていたかを伝票に書く、③箱から本を出して年齢別に分ける、④その年齢別に

分けたものを専用のカートンに入れる、⑤段ボール箱をつぶして片づける、という作業の流れが実にうまくいっています。

この場所を使ったことも不思議なタイミングでした。少し前までは、南部藩の宝物が展示されていた施設だったので、ほかに展示施設ができて展示物が移動されたばかりで、ちょうど使わせていただくことができました。これだけの施設を確保するのも、本当は大変です。今のところ、集まった本は10万冊以上で、届けた本は1万冊を超えています。

……最後に、中長期的な視点で被災地の子どもたちへの読書サポートを考えたとき、どんなビジョンをお持ちでしょうか。

小さな絵本カーを購入して、いろんな町に本を届けたい。それは、私が子どものころに紙芝居屋さんに来るのを楽しみにしていたようなことに似ていると思います。いずれにせよ、私たちは、このプロジェクトは本当に長い時間続けることが必要だろうと考えています。当面は、今お話しした形でやっています。最終的にはこの活動や本を、それぞれの町の図書館なりにきちんと引き渡すことができればいちばんいいなと思っています。

ありがとうございました。

著作権保護コンテンツプログラム

プログラム

未就学児

どこで／幼稚園・保育園・児童館
所要時間／10～15分×2プログラム テーマ／みんな、なかま！

このプログラムのポイント
夏はいつもと違う体験をしたり、遊んだり。そこに仲間があると楽しいと感じてほしいと思います。

プログラム A

①「どんな きぶん？」

作／サクストン・フライマン&ユースト・エルファーズ
訳／アーサー・ビナード 1,575円(福音館書店)

表情豊かな野菜や果物たちが、心に迫ります。いろいろな場面を思い出しながら、共感することも多いでしょう。導入として。



②「にじいろの さかな」

作／マーカス・フィスター 訳／谷川 俊太郎
1,890円(講談社)

きれいなのに誰にも好きになってもえなかったにじ魚……どうしたら幸せになれるのだろう。にじ魚の気持ちの変化を読みとってほしい。



③「けんかのきもち」

作／柴田 愛子 絵／伊藤 秀男
1,260円(ポプラ社)

迫力ある絵……ぐっと本の中に引き込まれて、「ぼく」の気持ちを追体験。読みを深めることができます。



プログラム B

①「えらい えらい！」

文／ますだゆうこ 絵／竹内 通雅
1,050円(そうえん社)

楽譜がついていて、声を出して歌いながら楽しめます。「子どもはえらい!」「けんかしても仲直りできるから」。



②「だめだめ すいか」

作・絵／白土 あつこ
1,260円(ひさかたチャイルド)

じいじにすいかを届けることをまかされたたっくん、途中で誘惑するタヌキを振りきり、じいじの家へ……。ほっとしたときにタヌキを思い出します。ユーモラスなやりとり、そして自分以外の者を思う気持ちに心があたまります。



③ 紙芝居「ぼくは かぶとむし」

作／渡辺 享子 1,680円(童心社)

カブトムシの成長が明快に描かれています。子どもたちにとって、小さな生き物は身近な仲間です。特に夏は大いに自然に親しまいたいものです。



(中野 裕子)

プログラム

乳幼児・未就園児

どこで／子育て支援センター 所要時間／約30分
テーマ／音とリズムを楽しもう

このプログラムのポイント
雨の日や暑くてたまらない日も、親子で楽しく過ごしましょう。言葉かけやふれあい遊びのヒントにどうぞ。

①「はじまるよったら はじまるよ」の歌で始まり。

②「いないいないばあ」

文／松谷 みよ子 絵／瀬川 康男
735円(童心社)

親子で一緒に「いないいないばあ」。最後にお子さんの名前も呼んであげて。



③「だーれかな だーれかな」

作／カズコ G・ストーン 845円(童心社)

音と絵をヒントに、誰だかわかったときは大喜び。そして、「こんにちは」のごあいさつ。「みんな友だち」から「きゅうりさんにもお友だちがいるよ」と次につなげて。



④「きゅうりさんととまとさんと たまごさん」

文／松谷 みよ子 絵／ひらやま えいぞう
840円(童心社)

「すいすい ちゃぶちゃぶ ちゃぶちゃぶ すいすい」の繰り返し心地いい。



⑤ ふれあい遊び「きゅうりちゃん」

幼い子はひざにのせて、少し大きくなって、ひとりできゅうりちゃんになれる子は、寝ころがって。言葉に合わせてゴロゴロ転がしたり、ムシャムシャとくすぐったりします。「きゅうりを1本とってきて」→体をきゅうりに見立てて、スーッとなでます。「水をかけて洗いましょう」→水をかけるふりをして、洗うまねをする。「お塩をかけて パッパッパ」→体の上で両手をパッパッパと開いて、塩をかけるまねをする。「ゴロゴロ ゴロゴロもみましよう」→あちちでゴロン、こっちでゴロンと転がります。これが一番楽しいみたい。「お料理しましょう トントントン」→体の上で包丁で切るまねをする。「みんなで食べましょ ムシャムシャムシャ」→ムシャムシャと言いながら、体のあちこちをくすぐって、食べるまねをする。

本の紹介

⑥「コッコさんとあめふり」

作・絵／片山 健 780円(福音館書店)

雨が降りつづく日に、てるてるぼうずの歌を歌いながら読んであげてください。



⑦ 紙芝居「よんで よんで」

作／ときわひろみ 絵／さとう あや
0・1・2かみしばい「みんなにここに」全6巻より
10,395円 分売不可(教育画劇)

ネコさんやイヌさんやブタさんに絵本を読んでもらうのもおもしろいけれど、やっぱりお母さんがいちばんです。



⑧「さよならあんころもち」

を歌って、おはなし会は終わります。

(松田 素子)

著作権保護コンテンツ

この人にあれもこれも

こんにちはは！ 絵本作家さん



「わにわに」シリーズ
などでおなじみ！

やまぐち

山口 マオさん

3歳の僕を超えたい

小さいころから絵を描くことが好きで、3歳のころには「絵描きさんになりたい」と憧れを抱き、大人になった今、夢を実現させた山口マオさん。「マオ猫」や「わにわに」など、個性的なキャラクターを生み出し続けているその背景に迫ります。

撮影/石川 正勝 取材・文/菅原 千賀子

好きな遊びは
やっぱり「お絵描き」

僕は千倉（千葉県）で生まれて、兄と姉が2人ずついる5人きょうだいの末っ子です。いつもみそっかすとして、一人前扱いをしてもらえない不満がけっこうあったようで、かんしゃく持ちだった。普段は機嫌がいいけれど、いろんな不満が蓄積されたり、うまく相手にわかってもらえなかったりすると、「うわー」と物を投げて壊したりひっくり返したり。幼稚園で団体生活をするようになってからは「わがままを言っちゃいけないだ」という気持ちになり、社会の中では自分の我を張らないおとなしい子になっていったようです。

好きだった遊びは、積み木、木登り、かくれんぼ、そしてお絵描き。このころに描いていた「ペンギンの親子」と「時計屋さんの絵が、今も残してあるんです。幼稚園の自由画帳に描いてあったものを、母親が捨てずに取っておいてくれました。大学を卒業したくらいのときに見せてもらったのですが、「へえ、こんなの描いていたんだ」と驚きましたね。自分で言うのもなんだけど、なかなかの傑作だったんですよ。

うーん、これを超える作品は、今のところまだ描いていないかもしれないなあ（笑）。

著作権保護コンテンツ

馬場のぼる没後10年記念展

馬場のぼるさん

11ぴきのねこ

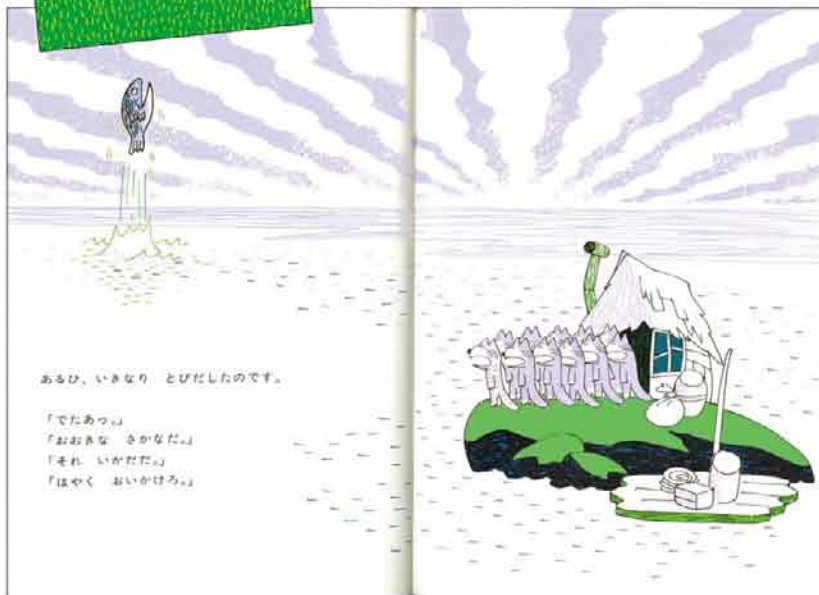
ニャーニャーニャー

「11ぴきのねこ」シリーズの絵本でおなじみの、馬場のぼるさん。没後10年之际、来る7月15日〜8月18日に教文館ウエントライトホールにて展覧会が開催されます。ニャゴニャゴ元気な、11ぴきのねこたちは、今年で44歳。馬場さんの足跡をたどります。



『11ぴきのねこ』
作/馬場のぼる
1,260円 (こぐま社)

とらねこ大将と10匹のネコたちが、力をあわせて怪魚を捕まえるストーリー。1967年に出版。親から子へ読み継がれている、馬場のぼるさんの代表作となったシリーズ1作目です。



あるひ、いきなり とびだしたのです。

「であつっ」
「おおきな きかんだ」
「それ いがだだ」
「はやく おいかけて」

最初の絵本は、 児童漫画家として出版

1967(昭和42)年に「11ぴきのねこ」を発表後、29年にわたり6作品を制作。代表作となった同シリーズは累計発行部数390万部を超える大人気のロングセラーとなり、今もなお、たくさんの子どものちに読み継がれています。

「幼いころから絵を描くのが好きで、物心つくころにはいつもそばに紙とクレヨンがあった」と画集「馬場のぼる ねこのせかい」(こぐま社)でも回想している馬場さんは、7歳のころには愛読していた少年漫画を真似し、漫画を描くように。そして、21歳のとき、処女作となる赤本漫画「怪盗カッポレ団」を出版。以来、児童漫画家として活躍を続けます。

そんな馬場さんの絵本としてのスタートは、ふろふき大根が大好物の山男が登場するおはなし「きつね森の山男」でした。これは、岩崎書店の「ポニーブックス」の1冊として出されたもので、漫画家が絵本を描いて出版したという点ではたぐいま

原画展に寄せて

れなこと。子どもの本の歴史の中でも画期的でした。

全11冊の「ポニーブックス」は横山隆一の「宇宙少年トンダー」、長新太の「ベタベタアンプンおさわぎ」、和田誠の「ぬすまれた月」、久里洋二の「プルンプルンおくつ」のほか、やなせたかしや柳原良平の絵本もあり、そのなかで「きつね森の山男」は産経児童出版文化賞を受賞。「ポニーブックス」は、本の背がつぶれてしまうという造本上の問題があり、その後、絶版になってしまいましたが、後年「きつね森の山男」は全場面を描き直して、こぐま社から出版。今も版を重ねるロングセラーになっています。

編集者、 佐藤英和さんとの出会い

最初の絵本「きつね森の山男」は、コマ割りのなどころがある多少漫画っぽい作品でしたが、2作目の「11ぴきのねこ」は完全に見開きの絵本でした。馬場さんは「そういう、ほんとの絵本の形としては、「11ぴき

著作権保護のねシリーズ



『11匹きのねことあほうどり』 『11匹きのねことぶた』 『11匹きのねこふくろのなか』
『11匹きのねことへんなねこ』 『11匹きのねこどろんこ』

作/馬場のぼる
各1,260円(こぐま社)

ちょっとずるくて欲深いところがあるものの、どこか間が抜けていて憎めない。ネコたちが繰り広げるおはなしは道徳的でないけれど、そこが人気の秘密。どの作品も予想のつかない展開で大笑い!

絵巻えほん

『11匹きのね マラソン大会』

作/馬場のぼる
2,100円(こぐま社)

アコーディオン式に折りたたまれた2.8mのパノラマ画面を引き出すと、マラソン大会のスタートからゴールまでが一望できる! 見開きごとにページをめくって、じっくり楽しむこともできます。



馬場のぼる ぼる・のぼる

1927年青森県生まれ。『ブウタン』で第1回小学館漫画賞受賞。『きつね森の山男』を出版後、本格的な絵本制作を開始。『絵巻えほん 11匹きのね マラソン大会』で、ポローニャ国際児童図書展エルバ賞受賞。2001年没。



のねこ」が私の中では最初ですね。ホンモノの絵本! フフツ」(『11匹きのねこ』誕生30周年記念 馬場のぼる特別インタビューより)と語っています。

「11匹きのねこ」の担当編集者で、こぐま社創業者(現・相談役)の佐藤英和さんが馬場さんに出会ったのは、河出書房で『小学生上級版』『小学生中級版』の編集をしていた駆け出し時代のことです。この雑誌は馬場さんや、馬場さんの大親友でもあった手塚治虫さんの絵物語を掲載していましたが、やがて河出書房の経営不振で2号で廃刊。その後、佐藤さんはこぐま社をおこし、絵本の仕事を始めるようになります。

日ごろから「絵本の仕事をしたいんだ」と語っていた佐藤さんに対し、「自分が本当にやりたいのは絵本なんだ」と打ち明けていた馬場さんは、こぐま社が設立されたことを大変喜んだといい、佐藤さんもさっそく絵本の仕事を依頼。その後1年かけて、『11匹きのねこ』が誕生します。

いいことをすればそれなりにいいことがあり、悪いことをすればその報いでひどいめにあう。当時の絵本にはそんな風潮が定番でしたが、『11匹きのねこ』はみんなで決めた約束を破って、魚を食べてしまうおはなしです。しかも、魚はまったく悪いことをしていません。むしろ、善良そうに描かれています。それなのに、まさかのどんでん返しで骨だけに。馬場さんと佐藤さんは、子どもは喜

ぶかもしれないけれど、大人からはきつと非難されるだろうと覚悟していたようですが、ふたりの予想に反して『11匹きのねこ』は産経児童出版文化賞を受賞。2作品連続の受賞となり、馬場さんは絵本作家として素晴らしいスタートを切ったのです。

『11匹きのねこ』誕生の背景と11匹きになった理由

佐藤さんから絵本の依頼を受けたころ、馬場さんの漫画にはネコがしょっちゅう登場し、仲間から、馬場猫。だとか、ネコババ。と呼ばれていたといえます。

そのため絵本を頼まれたときも、ネコがいっぱい出てくる、にぎやかで愉快で勇ましい冒険ものがないと、考えていたという馬場さん。そして、当時の馬場さんの漫画でこんなものがありました。

——おなかをすかせたドラネコがお城の屋根のシャチホコを見て、おいしそうな魚だと登っていく。もちろん食べられなくて残念そうに振り返ると、自分の後ろにノラネコがズラーッと連なっていた——

それを聞いた佐藤さんは「おもしろい!」と言い、おはなしはおなかをすかせたネコたちが大きな魚を食べに行く内容に。

そして、馬場さんが考えていた「いっぱいネコ」が数字としては半端な11匹になったのは、ジュー

イッピキという強烈な破裂音が強い印象を与えることにありました。

「それにね。縁起がいい。八と十一という数字には末広がり」と再出発の意味があり、縁起がいいのだけれど、ハチヒキだとう鼻に抜けてしまおうでしょ。そうだった、お話には何も関係ないようなところも、じつは大切なんです」（こぐまのともだち No. 40より）

読み継がれていく絵本には、人生で最も大事なことが語られている

当時、馬場さんの二女が通う幼稚園に「11ぴきのねこ」を献本したところ、1週間後に貼り出されていた子どもたちの感想画は、みーんな骨子にもなった魚の場面だったというソールドがあります。

それが「11ぴきのねこ」ができて、初めて感動したことです。

馬場さんはそう語っています。絵でおはなしを語ることは簡単なことではないと理解しながら、絵本は字の読めない子どもたちによって読まれるもの、おはなしを絵で語つて持った佐藤さん。そして、それをよくわかっていた馬場さん。「11ぴきのねこ」シリーズは、6冊すべてが出るまで、29年の歳月がかかりました。

馬場さんの没後、「馬場のぼるさんの絵本の仕事」と題した講演会で、

馬場のぼるさんの作品



馬場のぼるさんの自画像。

佐藤さんは「11ぴきのねこ」で展開されるドラマは、まさに人生そのもので、しかも人生を大きく肯定しています。この絵本には生きることの素晴らしさを経験するという一番大切なことが、素晴らしい絵で描かれていると思います」と述べています。

馬場さんは、遺作となった「ぶどう畑のアオさん」の奥付の絵を描いた4日後に永眠し、この絵本の最後のページには、アオさんが空に浮かんだ雲を見上げている絵があります。そして、こぐま社での最初の絵本となった「11ぴきのねこ」にも、同じようにネコたちが空に浮かんだ雲を見上げている絵があります。この不思議な偶然は何を意味するのでしょうか。

それは誰にもわかりませんが、もしかすると天国の馬場さんは雲の上からそつと、彼らに微笑みかけているのかもしれない。



『こぶたたんぽぽぼけつととんぼ』
作/馬場のぼる
1,155円（こぐま社）

子どもたちが大好きなしりとり遊びの絵本。主人公は、子ぶた、タヌキ、キツネ、ネコ。おにごっこやシャボン玉遊び、なわとびをしたり、大好きな遊びもいっぱい！



『ぶたたぬききつねねこ』
作/馬場のぼる
1,050円（こぐま社）

「おひさま」から始まるしりとりで、おはなしが進みます。アホウドリがりんごをつつくと、出てきたのはなんとゴリラ！絵を追っていくと、愉快なおはなしが展開。



『馬場のぼる ねこのせかい』
著/馬場のぼる
3,150円（こぐま社）

「11ぴきのねこ」シリーズ制作の裏話から、ねこ版「富嶽三十六景」「風の又三郎」「金色夜叉」まで、54枚のネコの絵と16編のエッセイで構成された珠玉の1冊。ファン必見です。

原画展のお知らせ

馬場のぼる没後10年記念展

11ぴきのねこがやってきた ニャゴ!ニャゴ!ニャゴ!

馬場のぼるの絵本原画やスケッチなどをご紹介します。
「11ぴきのねこマラソン大会」の約10mの大型パネルも展示。
ぜひこの機会にお越しください。

と き：7月15日(金)～8月18日(木)
11:00～19:00 ※入館は18:30まで

と ころ：教文館9F ウェンライトホール
(東京都中央区銀座4-5-1)

入 場 料：大人700円、大学・専門学生500円、
小中高生100円

お問い合わせ：03-3561-8446

<http://www.kyobunkwan.co.jp/>



『がまくん かろくん』
作/馬場のぼる
998円（こぐま社）

カエルのがまくんは、カエルのくせに泳ぎが苦手。それを知った友だちのかるくんは、なんとかがまくんが泳げるようにと、あれこれ知恵を絞ります。友だちっていいな。



『かえるがみえる』
作/まつおかきょうこ 絵/馬場のぼる
998円（こぐま社）

「かえるがみえる、かえるにあえる、かえるははえる」。韻を踏んだシンプルな言葉に、シンプルな挿絵が展開し、子どもたちの想像力を大きく羽ばたかせてくれます。

著作権保護コンテンツ

「馬場のぼる先生の思い出」

こぐま社（担当編集）関谷裕子さん



馬場先生の作品世界を支える故郷三戸

馬場先生のご生前、ご自宅や、たまにはお酒の席で、お話をうかがうのは本当に楽しい時間でした。絵本のこと以外でいちばん話題に上ったのは、青森県三戸町で過ごした少年時代のあれこれ、独特の間合いと表情で語られるそれは、まるで一編の「おはなし」のようでした。

友だちと一緒に飛び入り参加して2等になった城山の相撲大会のこと、大鍋と材料を抱えて野外でつくったまっ黄色のうどん粉カレーのおいしさ、家のそばにサメからゼラチンをとる工場があって、いつもカラスがたくさん群れていたこと、山道でキツネと出会い、目と目が合って、とても怖かったことなどなど。

やがて、先生の没後、町で開いてくださった偶ぶ会をきっかけに、私たちは、三戸町を何度も訪問するようになって、先生の作品の多くが、故郷の自然や人や風物に支えられていることに気づかされました。なだらかな姿の名久井岳、火の見櫓、さまざまな野の草花や、山のキツネやカラスたち……、どの絵本にも、三戸で見た風景がどこかに描かれていて、作品世界を支えているのでした。

『ぶどう畑のアオさん』
作/馬場のぼる
1,260円（こぐま社）

20年ぶりに絵を描きかえ、遺作となった作品。アオさんが夢で見たぶどう畑をめざして丘をのぼっていくと、本当にありました！ やさしいアオさんの人柄が作者と重なります。



『五助じいさんのキツネ』
作/馬場のぼる
1,260円（こぐま社）

五助じいさんの家に迷い込み、一緒に暮らすようになったキツネのコンコン。何度置っても湯たんぽにしか化けられないコンコンが、ある日、町に出かけることになり……。



『きつね森の山男』
作/馬場のぼる
1,360円（こぐま社）

寒がりの殿さまは、毛皮が欲しくて、キツネ狩り大作戦を企てます。ひよんなことからキツネ軍に入った山男は、大根つくりの名人。きつね森を耕して大根畑をつくります。



『アラジンと魔法のランプ』
文・絵/馬場のぼる
1,575円（こぐま社）

アラビアンナイトシリーズの第2弾です。仕立て屋の息子アラジンは毎日遊んでばかり。15歳になったある日、叔父さんと名乗る男が現れて……。ランプをめぐる奇想天外な物語。



『アリババと40人の盗賊』
文・絵/馬場のぼる
1,575円（こぐま社）

念願だったという馬場のぼる版『アリババと40人の盗賊』。原典の物語をできるだけ生かして再話。講談調のテンポのいい馬場流の語り口も楽しい1冊です。

馬場のぼる略年譜

（参考資料：青森県立美術館「馬場のぼる展」図録より）

2009（平成21）	1974（昭和49）	1967（昭和42）	1956（昭和31）	1949（昭和24）	1934（昭和9）	1927（昭和2）
2007（平成19）	1986（昭和61）	1966（昭和41）	1958（昭和33）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	10月18日、青森県三戸郡三戸町に生まれる。
2005（平成17）	1985（昭和60）	1963（昭和38）	1955（昭和30）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	2、3歳のころから絵を描くのが好きだった。描いた絵を8歳年上の姉が納屋の2階に貼り、「展覧会ごっこ」をしていた。
2004（平成16）	1984（昭和59）	1963（昭和38）	1951（昭和26）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	三戸町立三戸尋常高等小学校に入学。
2002（平成14）	1983（昭和58）	1963（昭和38）	1950（昭和25）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『らくる』（田河水泡）、『冒険タン吉』（島田啓三）などの少年漫画を愛読し、漫画を描くようになる。
2001（平成13）	1982（昭和57）	1963（昭和38）	1949（昭和24）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	小学校の代用教員として勤務するかわら、独学で漫画の勉強を始め、手塚治虫の漫画『新寶島』に衝撃を受ける。
2000（平成12）	1981（昭和56）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	三戸町出身の白木茂（児童文学者、翻訳家）の紹介で、大阪の出版社から処女作となる赤本漫画『怪盗カッポレ団』を出版。疎開先から東京に帰る白木茂と上京。
2000（平成12）	1980（昭和55）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	小学校年誌などでの仕事を開始。
2000（平成12）	1979（昭和54）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『おもしろフック』（集英社）創刊にともない、11月号より本格的な連載漫画『ポストくん』の執筆を開始。大人気になる。
2000（平成12）	1978（昭和53）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『東京児童漫画会』が発足。会員となる。発足会で手塚治虫と初対面を果たし、以後、生涯にわたって親交を持つ。
2000（平成12）	1977（昭和52）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	同年、走馬歌子と結婚。
2000（平成12）	1976（昭和51）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	漫画『フウタン』で第1回小学館漫画賞を受賞。
2000（平成12）	1975（昭和50）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	大人漫画家の親睦団体「漫画集団」に入団。大人漫画を描くようになる。
2000（平成12）	1974（昭和49）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	初の本格絵本『きつね森の山男』を出版し、翌年、第11回産経児童出版文化賞を受賞。
2000（平成12）	1973（昭和48）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	こぐま社との最初の仕事となる「ロンパールのほん」（野村トイ）に連載の仕事をスタート。
2000（平成12）	1972（昭和47）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『11びきのねこ』（こぐま社）を出版。
2000（平成12）	1971（昭和46）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	以後、『11びきのねこ』を『1996年』まで、29年間で6冊のシリーズを出版。ロングセラーとなる。
2000（平成12）	1970（昭和45）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『11びきのねこ』で第15回産経児童出版文化賞を受賞。
2000（平成12）	1969（昭和44）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	日本経済新聞に四コマ漫画『バクさん』を連載。
2000（平成12）	1968（昭和43）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『バクさん』、『11びきのねこ』とあほうどり』（こぐま社、1972年）で第19回文藝春秋漫画賞を受賞。
2000（平成12）	1967（昭和42）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	1972年、第19回文藝春秋漫画賞を受賞。
2000（平成12）	1966（昭和41）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	第1回『漫画家の絵本の会』に出品。
2000（平成12）	1965（昭和40）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	『絵巻えほん 11びきのねこ』を出版。
2000（平成12）	1964（昭和39）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	ローニヤ国際児童図書展で、エルバ賞を受賞。
2000（平成12）	1963（昭和38）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	1月に胃がんを診断され、翌月手術を受ける。
2000（平成12）	1962（昭和37）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	画文集『馬場のぼる ねこのせかい』（こぐま社）を出版。
2000（平成12）	1961（昭和36）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	第22回日本漫画家協会賞文芸大賞を受賞。
2000（平成12）	1960（昭和35）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	第18回読売国際漫画大賞・選考委員特別賞を受賞。
2000（平成12）	1959（昭和34）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	胃がん再発。再手術を受ける。紫綬褒章を受賞。
2000（平成12）	1958（昭和33）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	第18回読売国際漫画大賞・選考委員特別賞を受賞。
2000（平成12）	1957（昭和32）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1956（昭和31）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1955（昭和30）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1954（昭和29）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1953（昭和28）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1952（昭和27）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1951（昭和26）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1950（昭和25）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1949（昭和24）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1948（昭和23）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1947（昭和22）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1946（昭和21）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1945（昭和20）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1944（昭和19）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1943（昭和18）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1942（昭和17）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1941（昭和16）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1940（昭和15）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1939（昭和14）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1938（昭和13）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1937（昭和12）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1936（昭和11）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1935（昭和10）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1934（昭和9）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1933（昭和8）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1932（昭和7）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1931（昭和6）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1930（昭和5）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1929（昭和4）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1928（昭和3）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1927（昭和2）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1926（昭和1）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。
2000（平成12）	1925（昭和0）	1963（昭和38）	1948（昭和23）	1947（昭和22）	1947（昭和22）	青森県三戸町から名譽町民の称号を授与される。

著作権保護コンテンツ

「やさしい女の子とやさしいライオン」

ある日、ライオンと女の子が森の中で大きな卵を見つけました。これは私のもの、いいえ私のものと、卵の取り合いになり、森の動物たちもやってきて大騒ぎ！ひとつの卵をめぐるのかわいい駆け引きが思わずクスッと笑えます。



著／ふくだ すぐる
1,365円
(アリス館)

「フェリックスの空からみた町」

空から町を眺めると、人や物がまったく違って見えてきます。飛行機の好きなフェリックスと一緒に、空からの光景を楽しんでみましょう。農場、船着き場、遊園地……、見なれた町も新しい発見がいっぱい、地上からの目線で見た絵と比べてください。



構成・文・イラスト／マイケ・コーレ
絵・イラストの彩色／アーメレンツケ・コープマン
1,575円
(朝日学生新聞社)

「うさぎくんとはるちゃん」

うさぎくんは、はじめてのおうちに泊まりに行くことになりました。不安でいっぱいのおうさぎくんに、はるちゃんは一生懸命近づこうとするのですが、なかなかうまくいきません。ふたりの心の交流がやさしく描かれ、あたたかい気持ちになる物語です。



作・絵／おかだ ちあき
作／おかだ こう
1,365円 (岩崎書店)

「スティーヴィーのこいぬ」

スティーヴィーはある朝、子イヌを拾いました。飼い主を探しに外に出かけていきますが、見つかりません。果たしてスティーヴィーは子イヌを自分のものにする事ができるでしょうか。ドロシー・マリノの2色使いのやさしい絵は、懐かしくて心を癒します。



文／マイラ・ベリー・ブラウン
絵／ドロシー・マリノ
訳／まさき りこ
1,365円
(あすなろ書房)

「シルム 韓国のすもう」

勝ち残ったふたりのチャンサ(力士)がシルム(相撲)を戦います。意外な結果にびっくり。短い言葉に迫力ある動きを感じ、想像力をかき立てられます。韓国に古くから伝わる伝統行事から人々のにぎわいと喜びが伝わってきます。



作／キム・ジャンソン
絵／イ・スンヒョン
訳／ホン・カズミ
1,575円 (岩崎書店)

「串かつや よしこさん」

串かつ名人よしこさんが揚げるのは、人々を幸せにする串かつです。怒った人にはイカを揚げて「ま、いっか」とニコニコさせます。カッパルやどろぼうには、どんな串かつ？ 串かつの言葉遊びが楽しく。きっとあなたも食べたくなりますよ。



作／長谷川 義史
1,365円 (アリス館)

2010年12月〜2011年2月までに発売された新刊絵本のなかから、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。プレゼント応募はアンケート用紙、またはウェブから。

もう読んだ？

ゼーせんぶプレゼント

新刊 100!!

※出版社五十音順

👉 マークは乳幼児から、

👍 は中・高校生が楽しめる本です。

「とうさんとうさん いかがなものか？」

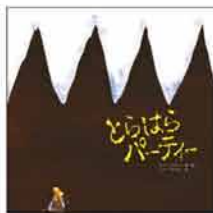
八百屋と花屋と石屋の父さんたちは仲よそで、元気に商いをしていました。ある日、八百屋の葉と石屋の石が、「花屋の娘を嫁にほしいが、いかがなものか？」と言ったのです。花屋の父さんは驚き、八百屋と石屋の父さんが張りきった、その結果は……。



作／穂高 順也
絵／西村 敏雄
1,260円 (あかね書房)

「とらはらパーティー」

日暮れの山道で迷った塩売りの前に、大きなほら穴が現れました。ところがそれは山ほどの大きさのトラの口だったのです。飲み込まれた塩売りは、おなかの底で炭売りと鍛冶屋に会いました。さあ、3人はどうやって空腹を満たしたのでしょうか？



作・絵／シン・トングン
訳／ユン・ヘジョン
1,575円 (岩崎書店)

「てんとうむしのはじめてのレストラン」

てんとうむしの好きな食べ物を探してレストランへ行きました。そこにはいろいろな味があります。からい、あまい、しょっぱい……。味の勉強とおはなしの中に隠れているものを探すクイズにもなります。



作／さいとう のぶ
1,260円 (アリス館)

「トリックアート図鑑 だまし絵」

トリックアートは、人間の目の仕組みをうまく利用したもの。古くから遊びのためだけでなく、建築や芸術の分野でも利用されています。収録されているのは、古典から最新まで70点の作品。「信じられない！」と思ったら、正規や紙で確かめてみましょう。



監修／北岡 明佳
構成・文／グループ・コロンプス
1,575円 (あかね書房)